

## 2つの相互評価による学修成果の可視化と改善

創価大学

田中亮平、関田一彦、望月雅光、山崎めぐみ

### 1 はじめに

創価大学はアクティブ・ラーニング（以下、AL）を積極的に導入している。本事業に採択された2014年度にはすでに、何らかの方法（≒AL）で能動的な学習を促す試みをする授業は珍しくなかった。そこで、図1の取組概念図のように、学年進行に応じて自らの学びを振り返るアセスメント科目制度を導入した。

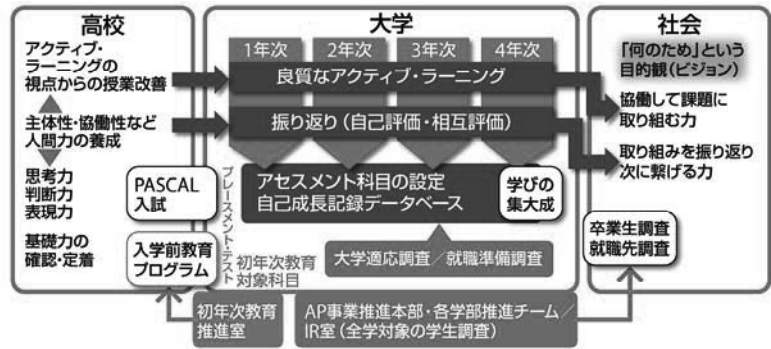


図1 創価大学におけるAP事業の取組概念図

この科目の中でそれまでの学修成果を振り返り、自己成長記録として残すことで、学生は学びのPDCAサイクルを意識するようになる。自身の学修を自己評価・相互評価する経験を通して形成される能動的な学びの姿勢は、本学が目標とする「創造的人間」にとって欠かせない素養である。

### 2 良質なアクティブ・ラーニングの導入・普及

本取組では、全学で実施している授業アンケートをもとに①授業外学修時間1時間以上、②授業理解度80%、③能動的な学習機会を認識した割合80%、の3条件を満たす科目を「良質なAL科目」と定義している。この条件を満たすような授業を設計するための2日間集中教員研修を学部ごとに実施し、4年間かけて専任教員の9割以上が参加した。こうした取組の結果、図2のようにALが行われている授業の割合は、取組開始時の57.8%から83.5%、そのうち、良質なALが行われている科目は、31.7%から57.6%へと大きく向上した。それに伴い、授業外学修時間も増加しており、何らかのALを行っている授業については、取組開始時の56分から101分となった。

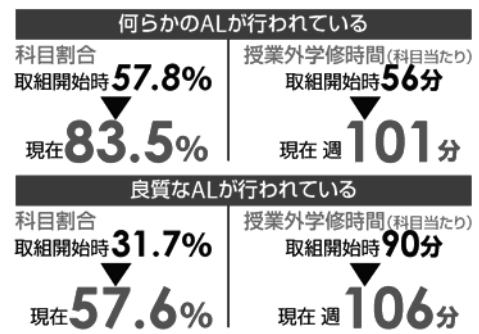


図2 AL導入科目の割合とそれに伴う授業外学修時間の増加

### 3 学習成果の可視化

本学で導入したアセスメント科目によって、学生は4年間を通して少なくとも3回、自己の学びを振り返り、自己評価する機会が提供されることになる。さらに、学生たちの自己評価を踏まえて、教員はセメスターごとに、同僚会議と呼ばれる改善検討会を行っている。同僚会議を円滑に進めるファシリテーターの養成にも力を入れ、30名の教員が2日間集中の研修に参加した。実際、2019年度は20セッションを開催し、延べ100名以上の教員が参加している。同僚会議を通じて授業改善に関する相互評価の機会を与え、教員側の授業改善に対する意識の変革を促している（図3）。

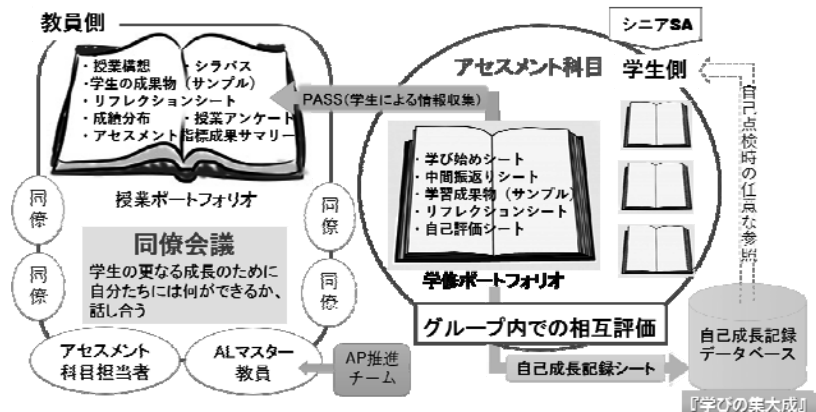


図3 2つの相互評価活動による学修成果の可視化と改善の試み